



特 248
942

文學博士 藤村 作註解

新選近代文學
心中天竺網島

近松門左衛門

始



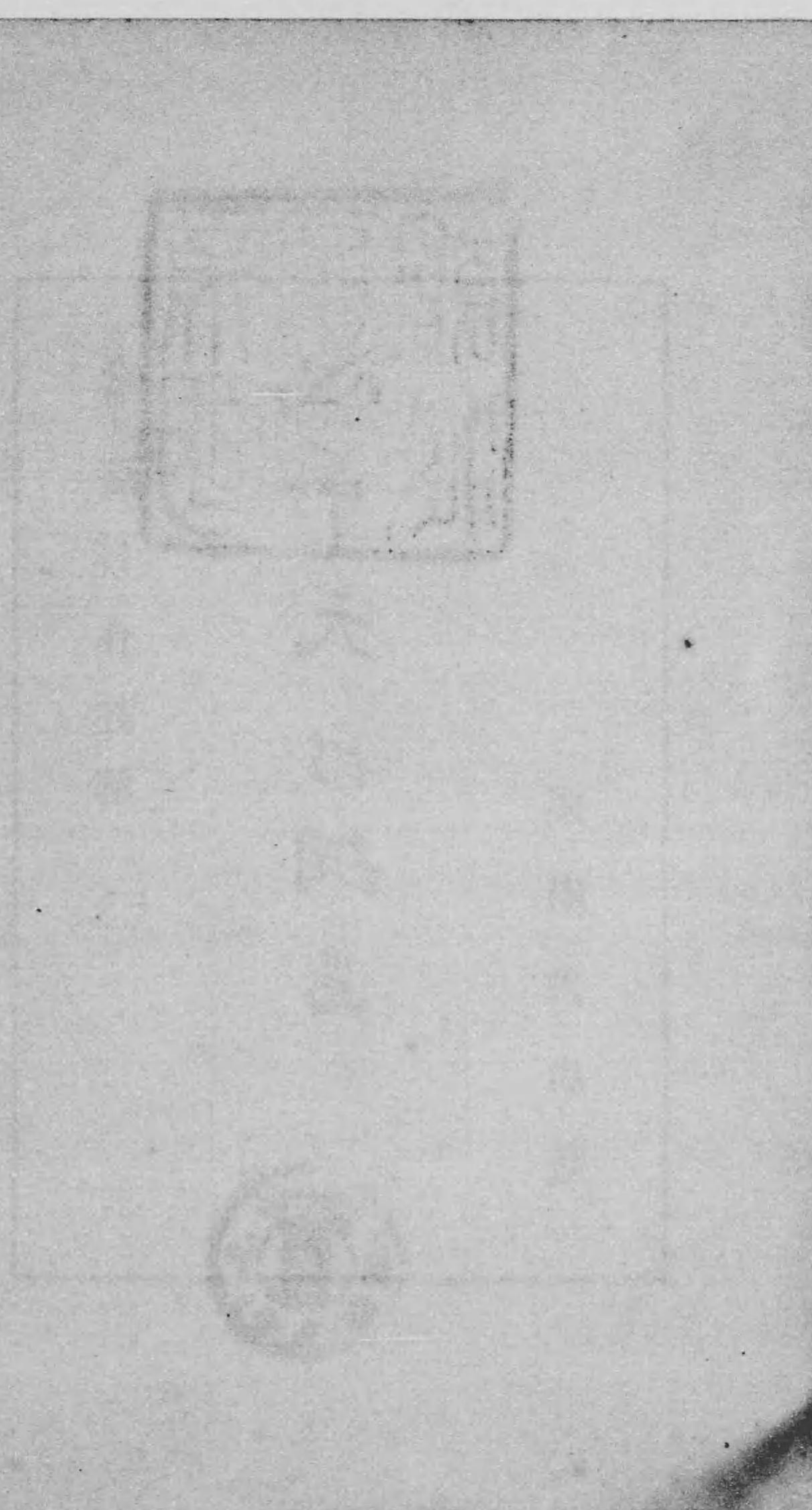
特248
942



文學博士藤村作註解

天竺網島

栗田書店版



序

近世文學は、これを國民的教養の上からいつても、人間教養の上からいつても、特に國文學鑑賞の上からいつて、これを現代に薦むべきものは少くない。偶々その時代の無氣力な享樂的生活を反映してゐる作品の多いところに教養上忌むべきものがないといはれぬのを遺憾とする。今こゝにかゝる弊を有しないとおもふものを集めて本叢書を作つた。

古典文學は註釋に依らなければ、一般國民には讀解は出來ないから、古來その註釋書評釋書の類は多く、屋上屋を架するにも至つたが、近世文學は、現代人には通讀して一通りの意を了解し得るから、殆どその註釋書はない。今日までのところ極めて稀である。併し試みに、自分一人で讀み、又その講筵に列した人に就いて聽いて見るがよい、講筵に聽いて始めて近世文學の眞意を知り、又その中の多くの知識を得、その興味を十分に知つたといふ人は、蓋し少くないであらう。本叢書はこのことに鑑みて、

一般讀書の爲に適當と信ずる註釋を施した。而してその程度は學究的煩瑣に陥らざるやう、さうして折角ありはありながら一向物足らないといふ不備を避けて、一讀その意を了得し得るに差支なきを期した。簡單にいへば大學、專門學校學生の自習程度にした積りである。

今や國民自覺の時代は來た。到るところに、皇國精神、日本精神の聲を聞く。しかし、何が皇國精神、日本精神であるかを知るには、眞に知るには、國史と國文學と、體驗とから、理解會得する外はない。國文學は決して獨り國文學者の國文學であつてはならない。本叢書の任はそこにある。著者の目的はそこにある。

藤村作

解説

本曲は享保五年十月十四日の夜より、翌十五日の未明にかけて、大阪の網島の大長寺境内に於て行はれた、紙屋治兵衛と紀伊國屋小春との心中事件を題材としたもので、同年十二月六日に竹本座に初日を出したのである。近松の六十八歳の作であるから、晩年の作品であるが筆勢益々冴え、曲中の人物は何れも若々しく躍動してゐるのである。殊に女房おさんの夫に對する愛の描寫は間然する所もない位である。近松の後期の作品として最も注目すべき作品である。外題は「かみや治兵衛きいの國や小はる」と角書にして、「心中天のあみ嶋」とある。天の網島は、地名網島に對し、老子の「天網恢恢疎而不漏」から取つたのである。

紙屋治兵衛
さいの國や小はる

心中天の網島

さん上(一)ばつからふんごろのつころちよ
つころふんごろで、まてとつころわつ
からゆ中つくる／＼／＼たが、笠をわん
がらんがらす、そらがく下んぐる／＼も、
れんげれんげればつからふんごろ(二)よ
ねが情中の、底深き、是かや戀の大海を、
かへも干されぬハルツシ蜷川、思ひ中ウ／＼の思ひ(三)
歌、心(五)が心留むるは門行燈あんどろの文字(六)が關、

心中天の網島

(一)「さん上ばつから云々」挿み詞を入れた當時の流行歌らしく、大體、カ行ラ行の同列音を重ねたもの。から、ころ、くるなどを同列の他の音の下に入れて挿みである。即ち上にア列の文字が来れば、ア列のからを入れ、オ列であれば、オ列のころ、ウ列であれば、ウ列のくるを入れてあるらしい。故に例へば「ばつから」は、ア段のばであるから、ばの發音上から、提音のつを入れ、ア段のからを附け、「ふんごろ」は、ふの次に、同じく發音上から、提音のんと入れ、こ、は、ふであるけれども、「ちよふ」と上から續けばおと發音されるから、オ列のころとなつたものと思はれる。のつころも、のの發音上から提音つが入り、オ段であれば、ころと附けたのである。からしてこの挿み詞だけを取つて見ると、「さん上ば(つから)ふんごろ(の)つころ(ちよ)ふんごろ(で)まてと(つ)つころ(わ)つ(く)る(／＼)／＼(た)が、(笠)を(わ)ん(が)らん(が)ら(す)、(そ)ら(が)く(ん)ぐ(る)／＼(も)、(れ)ん(げ)れ(ん)げ(れ)ば(つ)か(ら)ふ(ん)ご(ろ)よ」となり、大體、三條坊の丁で、待てとは云たが、笠をわす(忘すれの意か)、笠が疊ればふ…となるのだと思はれる。古來語あり、意味なきもの、或は外来語によるものなど言はれたが、以上の如く挿みと解されるのである。

(二)「よねが情」遊女の情。よねは、夜渡の義又渡よの轉倒など云ふが信じ難い。

(三)「かへも干されぬ蜷川」諺「蜷貝で大海をすくふ」から取り、それに蜷川の天神様の邊から被れて、中の島を挟んで流れてゐた蜷川にかけたのである。

(四)「思ひ歌」思ひ／＼即ち各自の意からつゞけたのである。思ひ歌は、思ひを致せた歌の意である。

(五)「心が心留むる」つひ自分の心から茶屋に心が引かれる意。

(六)「文字が關」茶屋の門行燈の文字に同音門司が關をかけたものである。上の留むるの讀。

浮かれぞめきのあだ淨瑠璃、役者物眞似納屋は歌二階座敷の三味線に、引かれて立寄る客も有り紋日通れて顔隠し、仕過しせじと忍び風仲居の清が是を見て、身を遁れが来りける、頭巾の鍔を取り外しく、二三度逃延びたれども、思ふおてきなれば遁さじと、飛びかゝりひつたり悪洒落、ごんせと留めたる女景清鍔と頭巾、つひ踏み被る客も有り、橋の名さへも梅櫻花を揃へし其中に、南の風呂の浴衣より今此新地に戀衣、紀の國屋の小春とは、此十月にあだし名を、世

(一)「浮かれぞめき」浮かれて素見する。
 (二)「あだ淨瑠璃」あだはむだの意で、出まかせの淨瑠璃。あだを仇と解する説もある。
 (三)「役者物眞似」役者の聲色を眞似する。
 (四)「納屋は歌」納屋は歌と見る説もあるが、納屋は、座敷敷の如く作つたもので、表座敷で遊ぶを離れ連中などが行つた。下の「二階座敷の三味線に」と掛け九のである。
 (五)「引れて」三味線の線。
 (六)「紋日」物日。麻に於ての行事。物日には客から願書の遊女に品物を祝儀として贈らねばならぬ習慣があつた。
 (七)「仕過しせじ」無駄金を使ふまい。
 (八)「忍び風」人目を忍んだ風にぞめいて行くのを。仕過しと忍びは、しの頭。
 (九)「仲居の清」清は固より女の名であるが、それを景清にきかす。
 (一〇)「身を遁れ」三保谷の地口。十行本には「三保谷がきたりける」となつてゐる。謡曲景清の「三保の谷が著たりける兜の鍔を取外し、二三度逃げ延びたれども、思ふ敵なれば遁さじと、飛懸り、兜おつとりえいと引く程に、鍔は切れて此方にとまれば」に掛つた文句である。三保の谷は、源氏の臣三保谷四郎で、ここは遊者を三保の谷に擲したのである。
 (一一)「頭巾の鍔」頭巾の左右及び後まで覆ひ垂れた所。
 (一二)「おてき」對手のこと。遊女にも、深客にも云ふ。
 (一三)「悪洒落」悪ふざけ。
 (一四)「ごんせ」来い。御座んせの訛。
 (一五)「踏み被る」胡麻化される。失敗する。被るは、頭巾の線。
 (一六)「梅櫻」梅田橋、櫻橋。
 (一七)「南の風呂」島内の風呂。風呂は風呂屋。湯女と稱する一種の遊女があつた。
 (一八)「浴衣」風呂の縁で、湯女を利かす。小春の前身が湯女であつたから。
 (一九)「戀衣」來にかける。浴衣の縁。
 (二〇)「紀の國屋」紀に著をかける。
 (二一)「十月」十月を一名小春と云ふによる。あだし名を云々は、十月に心中したからである。

に残せとの兆かや、今宵は誰か、呼子鳥、覺東なくも行燈の影行違ふよねの立歸り、ヤ小春様かなんといの、互に一座も打絶え、貴面ならねば便も聞かす氣色がわるいか、顔も細り窶れさんした、誰やらが咄で聞けば紙治様故、内からたんと客の吟味に逢はんして、どこへもむさとは送らぬの、いや太兵衛様に請出され、在所とやら伊丹とやらへ行かんす筈とも聞及ぶ、如何でござりやすと言ひければ、ア、もう伊丹／＼と言うてくだんすな、それでいたみ入るわいな、いとしばなげに紙治様と私が中、さ程にもないことを、あのせいこきの太兵衛が浮名を立て、言ひ散らし、客といふ客は退き果て、内からは紙屋治兵衛故じやと堰

(一)「誰か呼子鳥」古今集一、春、「一」ちこちのたづきも知らぬ山中に覺東なくも呼子鳥かな」による。今晩は誰かに呼ばれての意。
 (二)「なんといの」どうした事やら。
 (三)「一座」同席。
 (四)「貴面ならねば」顔を合せないから。
 (五)「氣色」氣分。體の工合。
 (六)「紙治様」紙屋治兵衛様の略。遊里にては客の名はかやりに略していふ習慣であつた。
 (七)「むさ」と「容易に」。
 (八)「在所」田舎。
 (九)「伊丹」太兵衛の在所。攝津國伊丹。
 (一〇)「いたみ入る」伊丹からつづけ九間の酒落。
 (一一)「いとしばなげに」可愛相に。いとほしむの尊嚴。
 (一二)「せいこき」贅言とき。樽上いふ者。
 (一三)「堰く」男女の間を隔障する。妨げる。

く程に、文の便も叶はぬ様になりやした、不思議に今宵は侍衆とて河庄かたへ送らるゝが、かう行く道でももし太兵衛に逢はうかと氣遣さく、敵持同然の身持、なんとそこらに見えぬかえ、フ、フ、フ、そんならちやつと外さんせ、あれ一丁目からなまいだ坊主が、てんがう念佛申して来る、其見物の中に、のんこに髪結うてのらしい、伊達衆自慢といひそな男、慥に太兵衛様かと思つた、あれ、愛へと言ふ間程なく炮烙頭巾の青道心、墨の衣の玉棒見物ぞめきに取巻かれ、鉦の拍子も出合ごん、ほでてん、ごねぶつにあだ口噛み交せて、樊噲流は珍しからず、門を破るは日本朝比奈流を見よやとて、貫の木逆茂木引き破り、右龍

(一)「河庄」揚屋の名。
 (二)「ちやつと」一寸。
 (三)「外さんせ」隠れて通り過ぎてよ。
 (四)「なまいだ坊主」文句に南無阿彌陀、南無阿彌陀を誦返して節面白く風をやらに誦して鐘を賣うた乞食坊主の類と察せられる。
 (五)「てんがう」唄れ、ふざけること。
 (六)「のんこ」野良者の結ぶ髪。
 (七)「のら」のら者の略。遊樂者。遊び人。興太もの。
 (八)「伊達衆自慢」男の立引をするを自慢らしくする者。男達。
 (九)「炮烙頭巾」大黒頭巾。炮烙の形をしてあるからいふ。腰裏などが被る。
 (一〇)「出合」出まかせ。
 (一一)「ほでてん」ほでは接頭語。てんは前出の、てんがう。
 (一二)「あだ口」無駄口。
 (一三)「道具屋」道具屋吉右衛門が臨り出した節。
 (一四)「樊噲流は珍しからず云々」月日の開まで、近松の「國姓爺合戦」九仙山の節。
 (一五)「右龍虎左龍虎」敵將の名。

虎左龍虎討取つて、難なく過ぐる月日の開や、なまみだなまいだ、く、く、く、迷ひ行けども松山に、似たる人なき浮世ぞと、泣いっエ、く、く、く、笑うつ狂亂の、身の果何と浅ましやと、芝を茵に臥しけるは目もあて、られぬ風情なまみだなまいだ、く、く、く、ぬい、ぬい、ぬい、ぬい、紺屋の徳兵衛、房に元より戀そめ込みの、内の身代灰汁でも剥げず、なまみだなまいだ、く、く、く、く、く、く、ア、是坊様、なんぞ、エ、忌々しい、やうく此頃此の廓の心中沙汰が鎮まつたに、それ措いて國姓爺の道行念佛が所望じやと、杉が袖から報謝の錢、たつた一錢二錢で三千餘里を隔てたる、大明國への長旅は、合はぬだ佛合はぬ

(一)「文彌アシ」天和・貞享頃岡本文彌の語り出した節。
 (二)「迷ひ行けども云々」「猶久末の松山」下巻、猶久狂亂道行の節。「雜鳴場・安治川・網島を、迷ひ行けども松山に似たる人なき浮世ぞと、泣いっ笑うつ狂亂の、身の果何とあさましやと、芝を褥に臥しけるは、目もあてられぬ風情なり」に應る。松山は、猶屋久兵衛の情婦、遊女の名。
 (三)「ぬい、ぬい、ぬい」近松作「丹波興作」の興作をどりの謡歌の最初に出現する。紺屋の徳兵衛、房は共に近松作「心中重井筒」の主人公。
 (四)「戀そめ込み」紺屋の縁語。
 (五)「灰汁でも剥げず」共に紺屋の縁語。
 (六)「國姓爺の道行」梅枝女道行を云ふ。
 (七)「杉」紀の國屋の女中の名。
 (八)「三千餘里」上の「一錢二錢」から三錢とかけたのである。梅枝皇女の道行は日本平戸から明國まで三千里の海路であるといふ意でいふ。
 (九)「合はぬだ佛」朝に合はぬと南無阿彌陀佛にかけける。

だ、く、く、ぶつ、く、言うて行過ぐる、人立紛れにちよこ
 く走りつつ河内屋に駆込めば、是はく、早いお出で、お名
 さへ久しう言はなんだやれ珍しい小春様く、遙々で小春
 様と主の花車が勇む聲、是門へ聞える、高い聲して小春く
 言うて下んすな、表に厭な李踏天があるわいの、密かに密
 かに頼みやすと、言ふも洩れてやぬつと入つたる三人連、
 小春殿李踏天とは、ない名を附けて下された、先づ禮から言
 ひましょ、連衆、内々咄した心中よしいきかたよし床よし
 の小春殿、やがて此男が女房に持つか、紙屋治兵衛が請出す
 か、張合ひの女房を近付に、成つて置きやとのさばり寄れば
 エイ聞きともない、え知れぬ人のあだ名を立て、手柄にな

(一)「ぶつ、く」合ぬだ佛からつゞけたのである。

(二)「とつ河内屋」とつかはからかけである。つかはは、佛にの意。

(三)「遙々で」小春の春から受けてゐる。

(四)「花車」遣り手や女將をいふ。

(五)「李踏天」圓陣聯合戦中の敵役。こは太兵衛を暗に云つたもの。

(六)「ない名」なき汚名、實なき汚名。

(七)「心中よし」心中立の立派な。眞實の情もある。

(八)「さきかた」氣立。ヤリかた。

(九)「張合ひ」競争。

(一〇)「え知れぬ」え知れぬはつまらぬ意。下のあだ名にかゝる。

らば精出して言はんせ、此小春は聞きともないといついと退
 けば又摺り寄り、聞きともなくとも小判の響で聞かせて見
 せう、貴様もよい因果じや、天満大阪三郷に男も多いに、紙
 屋の治兵衛二人の子の親、女房は従兄弟どし舅は伯母聲、
 六十日く、問屋の仕切にさへ追はる、商賣、十貫目近
 い金出して、請出すの根引くとは、螳螂が斧でござる、
 我ら女房子なければ、舅なし親もなし伯父持たず、身すが
 らの太兵衛と名を取つた男、色里で僭上言ふことは治兵衛
 めには叶はねども、金持つたばかりは太兵衛が勝つた、金
 の力で押したらばなう連衆、何に勝たうも知れまい、今宵
 の客も治兵衛めじや貰をく、此身すがら貰うた花車酒

(一)「大阪三郷」大阪を三區に分ち、淀川以北を天満組といひ以南を南北二組に分け、南組、北組と云つた。これが大阪三郷である。

(二)「六十日く」二ヶ月間定であつた。

(三)「仕切」仕切金。賣主が買主から受取るべき代金。立替金及び購入費の總金額。

(四)「根引く」請出す意。當時太夫を松の位と云つたので、松の縁でははれ九言葉。

(五)「螳螂が斧」諺。後漢書、螳螂傳「運三輪車之斧、即三輪車之隱」自分の力を盡らぬ意。

(六)「身すがら」係累の無さ。

(七)「僭上」分を越えたる事。

(八)「貰をく」貰はらう。他人の物に出てる遊女を我が座敷に呼ぶこと。

出しや〜、エ何おしやんす、今宵のお客はお侍衆、追付
 見えましよ、お前はどこそ脇で遊んで下さんせと、いへど
 もほたへた顔付にて、ハテ刀差すか差さぬか、侍も町人も
 客は客、なんば差いても五本六本は差すまいし、よう差い
 て刀脇差たつた二本、侍ぐるめに小春殿貰うた、抜けつ隠
 れつなされても、縁あればこそお出合申すなまいだ坊主の
 お蔭、ア、念佛の功力有難い、こちも念佛申そ、ヤ、鉦の火入
 煙管の撞木面白い、ちやん〜、ちや〜んちやん、ゑいゑ
 い〜〜、紙屋の治兵衛、小春狂ひが杉原紙で、一步
 小判紙ちり〜紙で、内の身代渡破紙の、鼻もかまれぬ紙屑
 治兵衛、エなまみだ佛なまいだ、なまみだ佛なまいだ〜

(一)「ほたへた顔」ふざけた顔。

(二)「杉原紙」杉に過ぎをかける。
 (三)「一步小判紙」金の一步に男の一分をかけ、同じく一步に小判紙をかけた。
 (四)「ちり〜紙」散り〜から塵紙につける。
 (五)「渡破紙」紙を漙く時破れた紙。破産の意にかける。

〜と、暴れ喚く門の口、人目を忍ぶ夜の編笠、ハア、塵紙
 わせた、ハテ殿い忍び様、なせ這入らぬ塵紙、太兵衛が念佛
 怖くば、なむ編笠も貰うたと、引きすり入れたる姿を見れ
 ば、大小くすんだ武士の正真、編笠越しにぐつと睨めたる、
 まん丸目玉は叩鉦、念とも佛とも出ではこそ、ハア、と
 いへども怯まぬ顔、なう小春殿、こちは町人刀差いたこと
 はなけれど、おれが所に澤山な新銀の光には、少々刀も
 捻ぢ歪めうと思ふもの、塵紙屋めが漆漉程な薄元手で、此
 身すがらと張合ふは慮外千萬、櫻橋から中町下りぞめいた
 ら、何處ぞでは紙屑踏み躪つてくりよ、皆おじや〜と、
 身振ばかりは男を磨く町一杯に、幅かつてこそ歸りけれ、

(一)「編笠」南無阿彌から編みにかける。
 (二)「くすんだ」地味な。
 (三)「新銀」享保銀。以前の四貫銀は悪質にて、享保七年には使用を禁ぜられた。
 (四)「漆漉」薄い吉野紙。漆を漙すに用ひる。
 (五)「櫻橋」會橋崎新地から南へ錦川に架けた橋。
 (六)「中町」櫻橋より南に當る東西の通りの町名。
 (七)「幅かつて」大威張で。

所^中がら馬鹿者に構はず^こ休へる武士の客、紙屋^中とよしあしの噂小春が身に應へ、思ひくづをれうつとりと、無挨拶なる折^中節、内^中から走つて紀の國屋の、杉がけうとい顔付にて、只今春様送つて参りし時、お客様まだ見えす、なせ見届けて來なんだと酷^中う叱られます、慮^中外ながらちよつと、編笠押上げ面體吟味、ム、そでない^中く^中氣遣ひなし、跡^中詰めてしつばりと小春様、したる^中樽の生醬油、花車様さらば後に青菜の浸し物と、口合^中たらん立歸る、至極堅^中手の侍、大きに無興^中しこりやなんじや、人^中の面^中を目利^中するは身を茶入茶碗にするか、黽^中られには來申さぬ、此方の屋敷は晝さへ出入堅く、一夜の他出も留守居^中へ斷り帳に付

(一)「内から」紀の國屋の家から。
 (二)「紀の國屋の」紀に來をかける。
 (三)「けうとい顔」氣の毒な顔色。

(四)「そでない」さうでない。紙治でなかつた意。
 (五)「跡詰めて」後々までも通ふやうに深く契りて。
 (六)「したる」舌たるき。聽めかし口調で。
 (七)「樽の生醬油」上の「したる」からつけられたに過ぎない。
 (八)「青菜」青を煮はらにかける。
 (九)「口合」酒肴。地口。
 (一〇)「堅手」堅果。物堅い氣質。

(一一)「留守居」留守居勢。藩藩の倉屋敷に廻る上役。

き、むつかしい掟なれども、お名聞いて懸慕うたお女郎、どうぞと一座を願ひ、小者も連れずに先刻参つて宿を頼み、なんでも一生の思ひ出、お情に預らうと存じたに、いかにつこりと笑顔^中も見せず、一言の挨拶もなく、懐^中で錢よむやうに扱^中々俯向^中いてばかり、首筋が痛みは致さぬか、なんと花車殿、茶屋へ來て産所^中の夜伽することは、つひにない圖とぶつ、けば、お道理く^中曰くを御存じない故御不審の立つ筈、此女郎には紙治様と申す深いお客様がござんして、今日も紙治様、明日も紙治様と、脇^中から手ざしもならず、外のお客は嵐の木の葉でばら^中く^中、上^中り詰めてはお客様にも女^中郎にもえて怪我のあるもの、第一勤めの妨げと堰くは

(一)「いかに」いかに。決して。
 (二)「懐で錢よむ」懐中で幣かに錢を勘定する。
 (三)「つひにない圖」全く例のなり事。

(四)「手ざし」指さしに同じ。
 (五)「上り詰め」夢中になる。熱中する。
 (六)「えて」よく。

何處しも親方のならひ、それ故のお客の吟味、おのづと小春様もお氣の浮かぬは道理、お客も道理だうり／＼の中取つて、主の身なれば御機嫌好かれが道理の肝心勘文、サアはつと飲みかけわさ／＼わつさり頼みます、小春様春様と、言へども何の返答も涙ほろりの顔振上げ、あのお侍様、同じ死ぬる道にも、十夜の内に死んだ者は、佛に成ると言ひますが定かいな、それを身が知ることか、旦那坊主にお問ひなされ、ほんにさうじや、そんなら問ひたいことがある、自害すると首括るとは、定めし此咽を切るかたが、たんと痛いでござんしよの、痛むか痛まぬか切つては見ず、大方な事間はつしやれ、ア小氣味の悪い女郎じやと、

(一)「主の身」花車自身をさす。
(二)「勘文」口拍子からたゞつけたに過ぎない。

(三)「わつさり」頼みに。

(四)「涙ほろり」涙の「な」を上への返答も「を」をつけて無にかけた。

(五)「十夜」浄土宗に於ける別時念佛。十月六日から十五日まで行ふ。

(六)「定」一定とも、必定ともいふ。きつとの意。

(七)「旦那坊主」檀那寺の坊主。

(八)「自害」刃物にて咽など切つて自殺する。自刃。

(九)「大方な事」大概な事。法外たるぬ程度のこと。

さすがの武士も打てぬ顔、エ、春様、初対面のお客にあんまりな挨拶、ちつと氣を變へ、どりやこちの人尋ねて來て酒にせうと、立出づる門は宵月の、影傾きて雲の脚、人足薄くなりけり、天満に年ふる、千早振る、神にはあらぬ紙様と世の鰯口に乗るばかり、小春に深く大幣の腐り合うたる御注連繩、今は結ぶの神無月、堰かれて逢はれぬ身と成果て、あはれ逢瀬の首尾あらば、それを二人が、最期日と、名残の文の言ひ交し、毎夜／＼の死覚悟、魂抜けてとば／＼うか／＼身を焦がす、煮賣屋で小春が沙汰、侍客で河庄方と耳に入るよりサア今宵と、覗く格子の奥の間に客は頭巾を願の、動くばかりに聲聞えず、可愛や小春が燈火に、

(一)「打てぬ顔」打合はぬ顔。合點の行かぬ顔。異しむ顔。

(二)「こちの人」花車の夫。

(三)「天満に年ふる」天満の土地に長く住んでゐた。

(四)「千早振る」神の祝詞。年ふるからふるの同音でつけたのである。

(五)「世の鰯口」鰯口は神社佛閣などの前に飾つてあり、参詣人が網をふつて鳴らすもの。それと共に世間の口にかけた。

(六)「大幣」大を遙ふにかけた。

(七)「腐り合はる」腐れ縁の意にかけた。幣が注連繩に腐つてついであるをいふ。

(八)「結ぶ」繩の縁語。結ぶの神も無いと、神無月とをかけた。

(九)「煮賣屋」上の「焦がす」からつづけた。

背けた顔のあの瘦せたことわい、心の中は皆おれがこと、
 此處に居ると吹込んで、連れて飛ぶなら梅田か北野か、エ
 エ知らせたい呼びたいと、心で招く氣は先へ身は空蟬の脱
 殻の、格子に抱き付きあせり泣き、奥の客が大あくび、思
 ひのある女郎衆のお伽で氣がめいる、門も靜かな、端の間
 へ出て行燈でも見て氣を晴さう、サアござれと連れ立ち出
 づれば南無三寶と、格子の小陰に肩身をすばめ隠れて聞く
 ども内には知らず、なう小春殿、宵からの素振、詞の端に
 氣を付ければ、花車が咄の紙治とやらと、心中する心と見
 た、違ふまい、死神ついた耳へは、意見も道理も入るまじ
 とは思へども、さりとて愚痴の至り、さきの男の無分別は

(一)「吹込んで」報せて。
 (二)「飛ぶなら梅田」吹きから、飛ぶ
 とつゞき、飛ぶから飛梅と利かせ、梅
 田北野とつづけたのである。

(三)「格子に抱き付き」空蟬の脱殻の
 殻。

(四)「行燈でも見て」茶屋の門行燈で
 も見ての意。

恨みず、一家一門其方を恨み惜しみ、萬人に死顔曝す身の

恥、親はないかも知れども、若しあれば不孝の罰、佛は
 愚か地獄へも暖かに、二人連では墮ちられぬ、痛はしとも
 笑止とも一見ながら武士の役、見殺しには成り難し、定め
 て金づく、五兩十兩は用に立て、も助けたし、神八幡侍冥
 利他言せまじ、心底残さず打ち明けやと、囁けば手を合せ、
 ア、忝い有難い、馴染みもないわたし、御誓言での情のお
 詞涙がこぼれて忝い、ほんに色外に顯るでござんする、
 いかにもく紙治様と死ぬる約束、親方に堰かれて逢瀬も
 絶え、差合ありて今急に請出すことも叶はず、南の元の親
 方と爰とに、まだ五年ある年の中、人手に取られてはわ

(一)「佛は愚か」小春が十夜の内死
 おは佛に成れるかとの問をうけたので
 ある。

(二)「暖かに」容易に。樂に。

(三)「笑止」氣の毒。
 (四)「一見」イチゲンと訓む。初對面。

(五)「待冥利」冥利は神佛の冥々の利
 益。武士としての幸を贈する意。

(六)「色外に顯る」誰「屋内にあれば
 色外に顯る」。

(七)「差合」故障。
 (八)「南の元の親方」南の島の内の風
 呂屋の親方。小春の前身は湯女であつ
 たから。
 (九)「爰」河内屋。

たしは固より主は猶一分立たず、いつそ死んでくれぬか、ア、死にましよと引くに引かれぬ義理詰めにふつと言ひかはし、首尾を見合せ合圖を定め、抜けて出よう抜けて出よと、いつ何時を最期とも其日送りの敢へない命、わたしひとり頼みの母様、南邊に賃仕事して裏屋住、死んだ跡では袖乞非人の餓死もなされうかと、是のみ悲しさわたしとても命は一ツ、水臭い女と思召も恥しながら、其の恥を捨て、死にともないが第一、死なずに事の済むやうにどうぞく頼みやすと、語れば領く思案顔、外にははつと聞き驚く、思ひがけなき男心木から落ちたる如くにて、氣も急き狂ひ扱は皆嘘か、エ、腹の立つ、二年といふ物化か

(一)「主」紙治。

(二)「抜けて出よ」抜けて出ようの語つたもの。

(三)「水臭い」薄情な。

(四)「木から落ちたる」語「木から落ちたる」。

(一)「腹いよか」腹をせしよるか。

(二)「期」死期。

された、根性くさりの狐め、踏ん込んで一打か面恥か、せて腹いよかと、齒切りきりく口惜涙、内に小春がかこち泣き、卑怯な頼みごとながら、お侍様のお情、今年中來春二月の頃迄、私に逢うて下んして、かの男の死に、來る度毎に、邪魔に成つて期を延ばし、おのづから手を切らば、先も殺さず私も命助かる、何の因果に死ぬる契約したとぞ、思へば悔しうござんすと膝に、凭れ泣く有様、聞届けた思案有り、風も來る人や見ると、格子の障子はたくと、立聞く治兵衛が氣も狂亂、エ、さすが賣り物安物め、ど性骨見違へ、魂を奪はれし巾着切め、切らうか突かうかどう障子に寫る二人の横顔エ、くらはせたい踏みたい、何

(三)「立聞く」障子を立てるに、立聞くをかけた。
 (四)「賣り物安物」色を賣る浮世商賣の女、安女郎だけに薄情な女であるといふ意。
 (五)「ど性骨」どは眞倒の掛頭語。
 (六)「どう障子」どうしよりに障子をかけた。

吐かすやら頷き合ひ、拜む囁く哮えるさま、胸を押さへ摩つても怵へられぬ堪忍ならぬ、心も急ぎに關の孫六一尺七寸抜き放し、格子の挟間より小春が脇腹、爰ぞと見極めると突くに座は遠く、是はとばかり怪我もなく透かさず客が飛びかゝり、兩手を掴んでぐつと引入れ、刀の下緒手ばしかく格子の柱にがんじ弱みしつかと締め付け、小春騒ぐな、覗くまいぞと言ふ所に亭主夫婦立歸り、是はと騒げば、ア、苦しいない、障子越しに抜身を突込む暴れ者、腕を障子に括り置く、思案あり繩解くな、人立ちあれば所の騒ぎ、サア皆奥へ、小春おじや行て寝よう、あいとは言へど見知り有る脇指の、突かれぬ胸にはつと貫き、酔狂の餘り色里に

(一)「關の孫六」美濃の刀匠。赤坂關一源。名は兼元。

(二)「挟間」格子の隙間。

(三)「がんじ弱み」腐木搦み。むちやくちやに搦めること。

(四)「小春」小に春をかけた。

(五)「突かれぬ」突かに柄をかけた。

は有る習ひ、沙汰なしに往なして遣らんしたら、ナア河庄さん、わしやよささうに思ひやす、いかな〜身次第にして皆這入りや、小春此方へと奥の影は見ゆれど括られて、格子手枷にもがけば締めまり、身は煩惱に繋がる、犬に劣つた生恥を、覺悟極めし血の涙絞り、泣くこそ不便なれ、ぞめきもどりの身すがら太兵衛、扱こそ河庄が格子に立つたは治兵衛めな、投げてくれんと、襟掻い掴んで引擔くあいた、た、あいたとは卑怯者、ヤアこりや縛り付けられた、扱は盗みほざいたな、ヤいき拘摸めどう拘摸めとはたとくらはせ、ヤ強盗めヤ獄門めとは賊とばかり、紙屋治兵衛盗みして縛られたと、呼ばはりわめければ行き交ふ人邊

(一)「身次第」自分の意見に任せて。

(二)「煩惱に繋がる、犬」註「煩惱の犬は追へども走らず」

(三)「覺悟極めし」覺に、生き恥をかくをかける。

(四)「ほざいたな」罵倒語。やりやがつたなの意。

(五)「いき拘摸め」生きは罵倒の接頭語。

(六)「どう拘摸め」どうも罵倒の接頭語。

(七)「くらはせ」縛りつける。

(八)「強盗」ガンダウ。強盗の音。

(九)「獄門め」獄門にさらされる奴。罵倒語。

近所も駆け集まる、内より侍飛んで出で、盗人呼ばりは
 汝か、治兵衛が何盗んだサアぬかせと、太兵衛を掻い掴み
 土にぎやつとのめらせ、起きれば踏み付け踏みのみし〜、
 引捉へてサア治兵衛、踏んで腹いよと足下に突付くるを、
 縛られながら頬櫃、踏み付け〜踏みさがされて土紛れ、
 立上つて睨め廻し、邊の奴原よう見物して踏ませたナア、
 一々に面見覺えた、返報する覺えて居れと、減らず口にて
 逃出す、立寄る人々どつと笑ひ、踏まれてもあの願、橋
 らか投げて水食らはせ遣るなく〜と追駆け行く、人立ち透
 けば侍立寄つて縛り目解き、頭巾取つたる面體、ヤア孫右
 衛門兄じゃ人、アツア面目なやとどうと坐し、土に平伏し

(一)「汝」お前。

(二)「のめらせ」のめらやうに縛は

(三)「頬櫃」頬げた。

(四)「踏みさがされ」踏み散らされ。

(五)「土紛れ」土まみれ。

(六)「睨め廻し」にらみ廻し。

(七)「減らず口」出放題にいふ。

(八)「あの願」あの口。

(九)「人立ち透けば」人立が少くなる

泣き居たる、扱は兄御様かいのと、走出づる小春が胸ぐら
 取つて引据ゑ、畜生め、狐め、太兵衛より先うぬを踏みた
 いと足を上ぐれば孫右衛門、ヤイ〜、其痴呆から事
 起る、人を誑すは遊女の商賣、今日に見えたか、此孫右衛門
 はたつた今一見にて女の心の底を見る、二年あまりの馴染
 の女、心底見付けぬうろたへ者、小春を踏む足で、うろたへ
 た汝が根性をなせ踏まぬ、エ、是非もなや、弟とはいひな
 がら三十に押懸り、勘太郎お末といふ六ツと四ツの子の親、
 六間口の家踏みしめ、身代漬る、辨へなく、兄の意見を受
 くることか、舅は伯母掣、姑は伯母じゃ人親同然、女房お
 さんは我爲にも従兄弟、結び合ひ〜重々の縁者親子中、

(一)「誑す」誑す。だます。

(二)「うろたへ者」馬鹿者。

(三)「押懸り」「おつ」は接頭語。お

(四)「踏みしめ」主人として。

一家一門參會にも、おのれが曾根崎通ひの、悔みより外餘の事は何も無い、いとしいは伯母じや人、連合五左衛門殿はにべもない昔人、嬬の甥子に倒され娘を捨てた、おさんを取返し、天満中に恥か、せんとこの腹立、伯母一人の氣扱ひ敵に成り味方に成り、病に成る程心を苦しめ、おのれが恥を包まゝる、恩知らず、此罰たつた一ツでも行先に的が立つ、かくては家も立つまじ小春が心底見届け、其上の一思案伯母の心も休めたく、此亭主に工面し、汝が病の根原見届くる、女房子にも見替へしは尤も、心中よしの女郎、ア、お手柄、結構な弟を持ち、人にも知られし粉屋の孫右衛門、祭の練衆か氣違ひか、遂に差さぬ大小ぼつこみ、藏屋敷の役人と、

(一)「參會」苦り集り。

(二)「にべもない」愛想もない。にべは、鯉から取つた鱈で、粘着力の強いもの。

(三)「倒され」だまされ。

(四)「氣扱ひ」心附。

(五)「包まゝ」かばふ。

(六)「行先に的が立つ」行く先即ち將來必ず罰が當る。

(七)「工面し」グメンと訓む。相談し。

(八)「見替へし」彼を棄てて、此を取る。

(九)「練衆」祭禮の際の練物の行列に出る人達。

(一〇)「ぼつこみ」ほりこみの音便。

(一)「小詰役者」下廻りの役者。

小詰役者の眞似をして、馬鹿を盡した此刀、捨て所が無いわいやい、小腹が立つやらをかしいやら、胸が痛い歯ざしみし、泣顔隠す遊面に小春は始終咽せ返り、皆お道理とばかりにて詞も、涙にくれにけり、大地を叩いて治兵衛、過つた〜兄じや人、三年先よりあの古理に見入られ、親子一門妻子迄袖になし、身代の手縫れも、小春といふ家尻切にたらされ後悔千萬、ふつつり心残らねば尤も足も踏みこまじ、ヤイ狸め、狐め、家尻切め、思ひ切つた證據は見よと、肌懸けたる守り袋、月頭に一枚づつ取交はしたる起請、合せて廿九枚戻せば戀も情もない、こりや請取れとはたと打付け、兄じや人、彼奴が方の我らが起請數改め請取つて、

(二)「詞も涙に」涙のなを無にかけた。

(三)「見入られ」魅惑され。

(四)「袖になし」顧みない。

(五)「手縫れ」縫製。ごたく。

(六)「家尻切」家後を切つて入る態度。罵倒語。

(七)「月頭」毎月のはじめ。

(二) こなたの方で火にくべて下され、サア兄きへ渡せ、心得こころえや
 したと涙ながら投げ出す守り袋、孫右衛門押し開き、一二ひふた
 三四みいよ、十廿九枚敷そろふ、外に通女の文こりやなんぢや
 と、開く所をア、そりや見せられぬ大事の文と、取付くを
 押し退け、行燈にて上書見れば小春様参る、紙屋内さんよ
 り、読みも果てずさあらぬ顔にて懐中ちゆうちゆうし、是小春、最前は侍
 冥利、今は粉屋の孫右衛門商冥利、女房限つて此文見せず
 我一人披見して、起請共に火に入る、誓文せいもんに違ひはない、
 ア、忝かたじけなくい、それで私が立ちますと、又伏し沈めば、ハア
 くく、うぬが立つの立たぬとは、人がましいい、是兄じ
 や人、片時かたときも彼奴かやつが面が見ともなし、いざござれさりなが

(一)「こなたの方で」貴方の手で。

(二)「女房限つて」女房にすら。

ら、此無念口惜むねがたしさどうも堪らぬ今生の思出、女が面一ツ
 踏む、御免あれとつゝと寄つてじだんだ踏み、エ、しなし
 たり、足かけ三年戀しゆかしもいと可愛かほひも、今日といふ
 今日たつた此足一本の暇乞ひまひぎと、額際ひたいのきをはつたと蹴うて、わつと
 泣出し兄弟づれ、歸る姿もいたくしく跡を見送りおく聲をあ
 げ、歎く小春もむごらしき、無心中むしんちゆうか心中か、誠の心は女
 房の其一筆の奥深く、誰たれがふみも見ぬ戀の道別れて、こそ
 は歸りけれ

中の巻

福徳ふくとくに、天満神あまみつの名を直ただに、天神橋あまのつしと行通ふ、所も神のお前まへ
 町營ちやうえいひ業わざも紙見世かみみよに、紙屋治兵衛かみやぢべゑと名を付けて千早振ちはやぶりる程

(一)「しなしたり」し損じた。通つた。失敗した。

(二)「無心中」薄情。眞實心なし。

(三)「誰がふみも見ぬ云々」小式部内侍「大江山いく野の道の遠ければまだ文も見ず天の橋立」により、ふみに踏、文をかけてある。

(四)「福徳に天満神」福徳に満つを、天満の神にかけたのである。

(五)「直に天神橋」そのまま、つげた天神橋。天神橋は、天満天神の前の通りの南に、淀川に架した長橋。

(六)「お前町」天満宮前町。

(七)「營む生業も神と同番の紙店に」神の御前に、營む生業も神と同番の紙店に。

(八)「千早振る程」千早振るは、神の枕詞。それに、客が降るほど買ひに来るとかけたのである。

買ひに来る、かみは正直商賣は所がらなり老舗なり、夫が
 火燧にうた、ねを枕屏風で風防ぐ、外は十夜の人通り見世
 と内とを一掃に、女房おさんの心配り、日は短し夕飯時
 市の側迄使に行て、玉は何して居る事ぞ、此三五郎めが戻ら
 ぬこと風が冷たい二人の子供が寒からう、お末が乳の飲み
 たい時分も知らぬ、あほうには何が成るしんきな奴じやと
 獨言、か、様ひとり戻つたと走り歸る兄息子、ヲ、勘太郎
 戻りやつたかお末や三五郎はなんとした、宮に遊んで乳飲
 みたいとお末のたんと泣きやりました、さうこそ〜、こ
 りや手も足も釘に成つた、父様の寝てござる火燧へあたつ
 て暖まりや、此のあほうめどうせうと待ちかね店に駆け出

(一)「かみは正直」謹「神は正直」「正
 直の類に神やどる」などによる。神と
 紙とをかける。
 (二)「所がらなり」場所柄もよし。
 (三)「十夜の人通り」十夜は前出。十
 夜参詣の往來人が多い。
 (四)「見世と内」商賣と内輪の生活と
 を。
 (五)「市の側」天神橋より下手の北
 岸。
 (六)「行て」行つて。
 (七)「玉」女中の名。
 (八)「三五郎」丁稚の名。
 (九)「二人の子供」お末と勘太郎。

(一〇)「あほうには何が成る」馬鹿者
 には何がなるのかといふので、人を罵
 る意。
 (一一)「しんき」しん氣苦男などの意
 で、苦男な奴。困つた奴。
 (一二)「宮」天満宮。

(一三)「釘に成つた」釘の如く冷くな
 った。

づれば、三五郎唯一人のらく〜として立歸る、こりや痴呆
 お末はどこに置いて來た、ア、ほんに何處でやら落しての
 けた、誰ぞ拾たか知らん迄、どこぞ尋ねて來ませうか、お
 のれまあ〜大事の子を怪我でもあつたら打ち殺すと、
 喚く所へ下女の玉お末を背中におう〜いとしゃ、辻に泣
 いてござんした、三五郎守するならろくにしやと喚き歸
 れば、ヲ、可愛や〜、乳飲みたからうのと同じく火燧に
 添乳して、是玉、其あほうめ覺える程くらはしや〜と、
 言へば三五郎かぶり振り、いや〜たつた今お宮で蜜柑を
 ニツづ、食はせ、わしも五ツ食うたと、あほうの癖に輕口
 立て苦笑ひするばかりなり、ヤあほうにか、つて忘りよ

(一)「おう〜」感動詞。買上にか
 け。
 (二)「ろく」まろく。まろく。十分
 に氣をつける意。
 (三)「覺える程」身におぼえるほど。
 心にしみる程。

とした申し／＼おさん様、西の方から粉屋の孫右衛門様と伯母御様、連れ立つてお出でなされます、是は／＼そんなら治兵衛殿起こそ、なう旦那殿起きさしやんせ、母様と伯父様が連れ立つてござるげな、此の短い日に商人が、晝中に寝た振りを見せては又機嫌が悪からう、おつとまかせとむつくと起き算盤片手に帳引寄せ、二壹天作五九引が三引六引が二引、七八五十六に成る伯母打ちつれて孫右衛門内に入れば、ヤ兄じや人伯母様是はようこそ／＼先是へ、私は只今急な算用致しか、る、四九卅六々三六が壹々八分で二分の勤太郎よお末よ、祖母様伯父様お出でじや煙草盆持つておじや、一三が三それおさんお茶上げましやと口早なり、

(一)「伯父様」子供の側から見てらよ。

(二)「おつとまかせ」まかせはもとは任せ。それから承知、合點の思に用ひるやうになつた。

(三)「五十六」九々の算と年齢とにかけた。

(四)「二分の勤太郎」二分の勤が立つ、即ち二分の差が出来る意から、勤太郎にいひかけた。

いや／＼茶も煙草も飲みには來ぬ、はおさん、いかに若い

とて二人の子の親、結構なばかりみめではない、男の性の悪いは皆女房の油断から、身代破り女夫別れする時は男ばかりの恥じやない、少目を明いて氣に張を持ちやいのと言へば、伯母様愚な事、此兄をさへ欺す不覺悟者女房の意見など温かに、ヤイ治兵衛、此孫右衛門をぬく／＼と欺し、起請まで返して見せ十日も立たぬに何じや請出す、エ、うぬはなあ、小春が借錢の算用か、措き居れと算盤追取り庭へくわらりと投げ捨てたり、是は近比迷惑千萬、先度より後今橋の間屋へ二度、天神様へ一度ならでは闕より外出ぬ私、請出すことは扱置き思ひ出しも出すにこそ、言やんな／＼

(一)「結構」人のよい事。温和なこと。
(二)「みめ」見え。名譽。
(三)「皆の悪い」悪性ともいふ。道徳すること。

(四)「氣に張」緊張する意。注意し。油断をしないで。

(五)「不覺悟者」不心得者。

(六)「温かに」下に、聞く管がなら意を加へて見るがよ。

(七)「今橋」北橋の二丁目、南の筋。天神橋南橋より二三丁下。

昨夕十夜の念佛に講中の物語、曾根崎の茶屋紀の國屋の小春といふ白人に、天満の深い大盡が外の客を迫ひ退け、直に其大盡が今日明日に請出すとの是沙汰、賣買高い世の中でも金と辯漢は澤山など、色々の評判、此方の親父五左衛門殿常々名を聞き抜いて、紀の國屋の小春に天満の大盡とは治兵衛めに極つた、鼻の爲には甥なれどこちらは他人娘が大事、茶屋者請出し女房は茶屋へ賣り居らう、着類きそげに疵附けられぬ間に取返してくれうと、沓脱半分下りられしをなう騒々しい神妙にも成ることを、明さ暗さ聞届け上(六)の事と押し宥め、此孫右衛門同道した、孫右衛門の咄には今日は昨日の治兵衛でない、曾根崎の手も切れ本人間

(一)「白人」文字はしろうとに宛てたもので、麻以外の遊女。白洲ともいつた。風呂屋者も白人である。

(二)「賣買高い世の中」物價の高き世帯中。

(三)「着類きそげに疵附け」頭蓋を用ひてある。着類にまだ手をつけてゐない間に、きそげには別に意味はない。疵を留めただけの時。

(四)「沓脱」文關の敷石。

(五)「神妙にも成ること」神かに驚かすに成ることも出来る意。神人を捕へる時、「神妙にしろ」といふ場合のものと同意。

(六)「上の事」それからの事。

の上々と、聞けば跡からはみ返るそも如何なる病ぞや、其

方の父御は伯母が兄、いとしや光譽道清往生の枕を上げ、

婿なり甥なり治兵衛がこと頼むとの一言は忘れねど、其方

の心一ツにて頼まれし甲斐もないわいのとかつばと伏して

恨み泣き、治兵衛手を打ち、ハア、讀めたく、取沙汰のあ

る小春は小春なれど、請出す大盡大きに相違、兄きも御存

じ先日暴れて踏まれた身すがらの太兵衛、妻子眷屬持たぬ

奴、金は在所伊丹から取寄する、疾くに彼奴めが請出すを

私に押さへられ、此度時節到來と請出すに極つた、我ら存

じも寄らぬ事と言へばおさんも色を直し、たとへ私が佛で

も男が茶屋者請出す、其のひいさせう筈がない、是ばかりは

(一)「はみ返る」再び舊のやうになる。

(二)「光譽道清」治兵衛の父の戒名。

(三)「其方の心一ツにて」そなたの心掛一つから。

(四)「押さへられ」引留められ、渡さぬこと。

此方の人に微塵も嘘はない母様、證據にわしが立ちますと、夫婦の詞割符も合ひ扱はさうかと手を打つて伯母甥心を休めしが、ム、物には念を入れう事、まづ嬉しい逆もに心落付く爲、かたむくろの親父殿疑ひの念なき様に誓紙書かすが合點か、何が扱千枚でも仕らう、いよ／＼満足則ち道にて求めしと孫右衛門懐中より、熊野牛王の村鳥比翼の誓紙引換へ、今は天罰起請文小春に縁切る思ひ切る、偽り申すに於ては上は梵天帝釋下は四大の文言に、佛揃へ神揃へ紙屋治兵衛名をしつかり、血判を据ゑて差出す、ア、母様伯父様のお蔭で私も心落付く、子中生しても遂に見ぬ固めごと皆悦んで下さんせ、ヲ尤も／＼此氣になれば固まる商ひ事も

- (一)「割符も合ひ」 びつたり合ふ。符節を合せたやうである。
- (二)「逆もに」 とてものことに。
- (三)「かたむくろ」 頑固。偏屈。

- (四)「熊野牛王」 紀州熊野神社から出す符札。熊野牛王寶印の文字と熊野の神の使たる鳥を七十五羽印刷してある。起請文はこの裏に書く習慣であった。
- (五)「村鳥」 牛王の群鳥の謂。
- (六)「比翼の誓紙」 比翼連理の契を結ぶ誓紙。
- (七)「引換へ」と通つて、反對に。
- (八)「天罰起請文」 誓を違へたら天罰を蒙るやうにと記した起請文。
- (九)「梵天」 大梵天の主。淫欲を離れ清淨潔白な佛。
- (一〇)「帝釋天」 初利天の主。喜見城に居り、四天王及び三十二天を領し、佛法を擁護し、阿修羅を征する佛。
- (一一)「四大」 地水火風。
- (一二)「紙屋治兵衛」 上の神からつづけたのである。
- (一三)「子中生して」 子供まで持つ

繁昌しよ、一門中が世話かくも皆治兵衛爲好かれ、兄弟の孫共可愛さ、孫右衛門おじや早う歸つて親父に安堵させたい、世間が冷える子供に風ひかしやんな、是も十夜の如來の御蔭是からなりともお禮念佛、南無阿彌陀佛と立歸る心を直に佛なる、門送りさへそ／＼に闕も越すや越さぬ中、火燧に治兵衛又ころり被る蒲團の格子嶋、まだ會根崎を忘れずかと呆れながら立寄つて、蒲團を取つて引退くれば枕に傳ふ涙の瀧身も浮くばかり泣きわたる、引起し引立て火燧の櫓に突き据ゑ、顔つく／＼と打眺め、あんまりじや治兵衛殿、それ程名殘惜しくば誓紙書かぬが好いわいの、一昨年(六)の十月中の亥の子に火燧明けた祝儀とて、まあ是爰で枕並べて

- (一)「世話かく」 世話やく。
- (二)「孫右衛門」 上の孫からつづける。
- (三)「世間が冷える」 時候が寒いといふ程の意。
- (四)「越すや越さぬ中云々」 この頭韻をあはせ、越すや越さぬ中、火燧に治兵衛またころり。
- (五)「格子嶋」 格子嶋から藤の格子嶋を聯想して、下に會根崎と續けたのである。
- (六)「中の亥の子」 一月に三回ある亥の日の中にあたる亥の日。亥は極陰にて、火災を除ける習慣から火燧をあけるのか。

此方、女房の懐には鬼が住むか蛇が住むか、二年といふもの
 巢守にしてやうく母様伯父様のお蔭で、睦まじい女夫ら
 しい寝物語りもせうものと、楽しむ間もなくほんに酷いつ
 れないさ程心残らば泣かしやんせく、其涙が蜆川へ流れ
 て小春の汲んで飲みやらうぞ、エ、曲もない恨めしやと、
 膝に抱付き身を投げ伏し口説き、立て、ぞ歎きける、治兵
 衛眼押し拭ひ、悲しい涙は目より出で、無念涙は耳からなり
 とも出るならば、言はずと心を見すべきに、同じ目よりこぼ
 る、涙の色の變らねば、心の見えぬは尤もく、人の皮被た
 畜生女が、名残も糸瓜も何ともない、遺恨ある身すがらの太
 兵衛、金は自由妻子はなし請出す工面しつれども、其の時迄

(一)「巢守」何時までも巢に籠つてゐる男、即ち空圖を守ること。

は小春めが太兵衛が心に従はず、少しも氣遣ひなされな縦

へ此方さんと縁切れ、添はれぬ身になりたりとも、太兵衛に
 は請出されぬもし金堰で親方から遣るならば、物の見事に
 死んでみしよと、度々詞を放ちしがこれ見や退いて十日も
 立たぬ中、太兵衛めに請出さる、腐り女の四ツ足めに、心
 はゆめく残らねども、太兵衛めがいん言吐き、治兵衛身
 代行きついで金の詰つてなんど、大阪中を觸れ廻り間
 屋中の交際にも、面を守られいき恥かく胸が裂ける身が燃
 える、エ、口惜しい無念な熱い涙血の涙、ねばい涙を打越え
 熱鐵の涙がこぼる、とどうと伏して泣きければ、はつとお
 さんが興さめ顔、ヤアウハウそれなればいとしや小春は死

(一)「金堰」金力ですること。

(二)「四ツ足め」畜生め。

(三)「いん言吐き」高慢な口をきくこと、暗黒に就いては、威厳、因言などの説あり、明かでない。

(四)「行きついで」行詰つた。

(五)「面を守られ」顔を見守られる。

(六)「ねばい涙」ねばくした涙。

にやるぞや、ハテサテなんば利發でもさすが町の女房じや
 の、あの無心中者何の死なう、灸をする薬飲んで命の養生す
 るわいの、いやさうでないわしが一生言ふまいとは思へど
 も、隠し包んでむざ／＼殺す其罪も恐ろしく、大事の事を
 打明ける、小春殿に不心中芥子程もなければども、二人の手
 を切らせしは此のさんが機關、こな様がうか／＼と死ぬる
 氣色も見えし故、あまり悲しき女は相見互ひと、切られぬ
 所を思ひ切り夫の命を頼む／＼と、掻き口説いた文を感じ、
 身にも命にも換へぬ大事の殿なれど、引かれぬ義理合思ひ
 切るとの返事、わしや是守に身を離さぬ、是程の賢女がこ
 なさんとの契約ちがへ、おめ／＼太兵衛に添ふものか、女

(一)「町の女房」町人の女房。素人女。

(二)「引かれぬ義理」止められぬ義理。

(一)「我人一向」誰れでもたゞ一途に。
 (二)「思ひ返し」心を顧す。考へ直す。
 (三)「ひよんな事」飛んでもない事。變な事か。

(四)「敗亡」狼狽する。

は我人一向に思ひ返しのないもの、死にやるわいの／＼、
 ア、ア、ひよんな事サアサアサどうぞ助けて／＼と、騒げ
 ば夫も敗亡し、取返した起請の中知らぬ女の文一通、兄さ
 の手へ渡りしはお主から行た文な、それなれば此小春死ぬ
 るぞ、ア、悲しや此人を殺しては、女どしの義理立たぬ
 まづ此方さん早う行て、どうぞ殺して下さるなと夫に絶り
 泣き沈む、それとても何とせん半金も手付けを打ち、繋ぎ
 留めて見るばかり、小春が命は新銀七百五十匁飲まさねば
 此世に留むる事ならず、今の治兵衛が四ツ三貫匁の才覺、
 打砕いでも何處から出る、なう仰山なそれで濟まばいと易
 しと、立つて簞笥の小引出し明けて惜しげも緬ひ交せの、

(五)「新銀」前出。享保銀。
 (六)「四ツ三貫匁」四貫銀での三貫目。四貫銀一貫目は、新銀二百五十目替に當る。新銀は四貫銀に比すれば四倍の値打がある。
 (七)「才覺」工面。
 (八)「打砕いでも」こた／＼に砕いても。
 (九)「緬ひ交せ」色々の糸を緬ひませた紐。緬いに無いかけた。

紐付袋押開き投げ出す一包、治兵衛取上げヤ金か、しかも新銀四百め、こりやどうしてと我が置かぬ金に目覺むるばかりなり、その金の出所も跡で語れば知れること、此十七日岩國の紙の仕切銀に才覺はしたれども、それは兄御と談合して商賣の尾は見せぬ、小春の方は急な事そこに四々の壹貫六百匁、ま壹貫四百匁と、大引出しの錠明けて算筒をひらりと寓八丈、京縮緬の明日はない夫の命白茶裏、娘のお末が両面の紅絹の小袖に身を焦す、是を曲げては勘太郎が手も綿もない袖無の、羽織も交せて郡内の始末して着ぬ浅黄裏、黒羽二重の一張羅定紋丸に蔦の葉の、退きも退かれもせぬ中は内裸でも外錦、男飾りの小袖迄浚へて物數十

(一)「商賣の尾」商賣上の失敗。
 (二)「四々の一貫六百匁」新銀四百匁を四貫銀に換算したのである。新銀一匁は、四貫銀四匁の割。
 (三)「ま一貫四百匁」ま一貫四百匁。
 (四)「ひらりと寓」飛びに、寓八丈の、寓をかけた。寓八丈は、寓色と寓色とで縮緬に縮つた寓八丈のやうなもの。
 (五)「京縮緬」京に今日をかけ、次の、明日に縮める。
 (六)「白茶裏」薄茶色の裏。白に知らをかけた。
 (七)「両面」表と裏と同じ綿を用いたもの。
 (八)「紅絹」赤い所から、身を焦がすとつづけられた。
 (九)「曲げ」入算する。算に普通七の字の形から出たとす。
 (一〇)「手も綿もない袖無」どうする手取もない意をかけて、綿もない袖無と續けてある。
 (一一)「始末」節候。端にかける。
 (一二)「一張羅」唯一つ持つ着。
 (一三)「蔦の葉の五々」松の葉葉、五、蔦の葉「蔦の葉」と落しておきて、蔦に蔦の葉のき心、つたの葉、蔦に、蔦に蔦の葉のき心。
 (一四)「退きも退かれも」退きは断と通れる意をかけた。
 (一五)「内裸でも外錦」誰一男は内裸でも外錦。男は世間の見えを見よ意。

五色、内ばに取つて新銀三百五十匁、よもや貸さぬと云ふことは無い物迄も有り顔に、夫の恥と我義理を一つに包む風呂敷の中に、情をこめにける、私や子供は何着いでも男は世間が大事、請出して小春も助け、太兵衛とやらに一分立て、見せて下さんせと、いへども始終さし俯向き、しく泣いてゐたりしが、手付け渡して取り止め請出して其後圍うて置るか内へ入るゝにしてから、其方は何と成ることぞと言はれてはつと行き當り、アツアさうじや、ハテ何とせう子供の乳母か、飯焚か、隠居なりともしませうとわつと叫び伏し沈む、あまりに冥加恐ろしい此治兵衛には親の罰天の罰、佛神の罰は當らずとも女房の罰一ツでも將來は

(一)「内ばに取つて」最少限度に見物つ。
 (二)「無」上下にかつてある。

よくない筈、許したもれと手を合せ口説き敷けば勿躰な
 い、それを拜む事かいの手足の爪を放しても、皆夫への奉公
 紙問屋の仕切金、いつからか着類を質に間を渡し、私が筆筒
 は皆空敷それ惜しいとも思ふにこそ、何いうても跡へんで
 は返らぬ、サア／＼早う小袖も着替へてにつこり笑うて行
 かしやんせと、下に郡内黒羽二重嶋の羽織に紗綾の帯、金
 ごしらへの中脇指今宵小春が血に染むとは佛や知ろし召さ
 るらん、三五郎爰へと風呂敷包み肩に負はせて供につれ、
 金も肌身にしつかと付け立出づる門の口、治兵衛は内にお
 居やるかと毛頭巾取つて入るを見れば、南無三寶舅五左衛
 門是は扱、折も折ようお歸りなされたと夫婦は顛倒狼狽ゆ

(一)「手足の爪を放しても」妻が夫に對する犠牲的なる行爲を極端にいつたもの。
 (二)「間を渡し」其の場をとりつくるよ。
 (三)「跡へん」後の祭。事の済んだる。

(四)「紗綾」縷に似た純地の絹織物。

(五)「毛頭巾」毛皮で造つた頭巾。

る、三五郎が負うたる風呂敷もぎ取つてどつかと坐り尖り
 聲、女郎下にけつからう、聲殿是は珍しい上下着飾り、脇
 指羽織あつばれよい衆の金遣ひ、紙屋とは見えぬ、新地への
 御出でか御精が出まする、内の女房いらぬ物おさんに暇や
 りや、つれに來たと口に針有る苦い顔、治兵衛は兎角の言句
 も出ず、父様今日は寒いによう歩かしやんす、先づお茶一
 ツと茶碗をしほに立寄つて、主の新地通ひも、最前母様孫右
 衛門様お出でなされて、段々の御意見熱い涙を流し、誓紙
 を書いての發起心、母様に渡されしがまだ御覽なされぬ
 か、ヲ、誓紙とは此事かと懐中より取出し、あはう狂ひす
 る者の起請誓紙は方々先々、書き出し程書き散らす、合點

(一)「尖り聲」鋭き聲、即ち怒つた聲。
 (二)「女郎」女を蔑倒していふ語。今日でも關西地方でいふ。
 (三)「けつからう」「居れ」の罵倒語。
 (四)「よい衆」金持。富者。
 (五)「新地」曾根崎新地。
 (六)「やりや」やりな。
 (七)「口に針」諺。言葉に針を持つ意。
 (八)「兎角」兎や角。
 (九)「しほ」機會。
 (一〇)「書き出し」勸定書。つけ。懸賞の請求書。

行かぬと思ひく、來れば案の如く、此態でも梵天帝釋か、
 此手間で離別狀書けとすんく、に引裂いて投げ捨てたり、
 夫婦はあつと顔見合せ呆れて、詞もなかりしが、治兵衛手
 をつき頭を下げ、御立腹の段尤もとお詫び申すは以前の
 事、今日のただ今より何事も慈悲と思召し、おさんに添は
 せて下されかし、たとへば治兵衛乞食非人の身となり、諸
 人の箸の餘りにて身命は繋ぐとも、おさんはきつと上に据
 る憂目見せずつらいめさせず、添はねばならぬ大恩有り、其
 譯は月日もたち私の勸方身上持直し、お目にかくれば知る
 、事それ迄は目を塞いで、おさんに添はせて給はれとはら
 く、こぼす血の涙壘に、くひ付き詫びければ、非人の女房

には尙ならぬ離別狀書けく、おさんが持參の道具衣類數
 改めて封付けんと、立寄れば女房慌て着る物の數は揃うて
 有る、改むるに及ばぬとかけ寒がれば突き退けてぐつと引
 出し、コリヤどうじや、又引出してもちんからり有りたけこ
 たけ引出しても、繼切れ一尺あらばこそ葛籠長持衣裳櫃、是
 程空に成つたかと眞は怒りの目玉も据わり、夫婦が心は今
 更に明けて悔しき浦嶋の、火燵蒲團に身を寄せて火にも入
 りたき風情なり、此風呂敷も氣遣ひと引きほどき取散らし、
 さればこそく、是も質屋へ飛ばすのか、ヤイ治兵衛女房子
 供の身の皮剥ぎ、其手でおやま狂ひ、いけどう拘摸め女房
 共は伯母甥なれど此五左衛門とはあかの他人、損をせう誼

(一)「ちんからり」すつかり空處になつてゐる意。
 (二)「有りたけこたけ」こたけは口拍子からつたまでである。有る限り。
 置く。

(三)「明けて悔しき」藤「あけて悔しき玉手箱」を判かす。
 (四)「浦嶋の火燵」島に蒲、子に火燵のこをかけた。
 (五)「火にも」火燵の縁から。

みがない、孫右衛門に断り兄が方から取返す、サア離別状
 くと七重の扉八重の鎖、百重の圍みは遁る、とも遁れ方
 なき手詰の段、ヲ、治兵衛が離別状筆では書かぬ是御覽せ、
 おさんさらばと脇指に手をかくる縫り付いてなう悲しや、
 父様身に誤りあればこそ段々の訖言、あんまり利運過ぎま
 した、治兵衛殿こそ他人なれ子供は孫可愛うはござらぬか、
 わしや離別状は請取らぬと、夫に抱き付き聲を上げ泣叫、
 ぶこそ道理なれ、よい、離別状いらぬ女郎め来いと引つ
 立つる、いやわしや行かぬ飽きも飽かれもせぬ中を、何の
 恨みに晝日中女夫の恥は曝さぬと泣詫ぶれども聞入れず、
 此上に何の恥町内一杯わめいて行くと、引つ立つれば振放

(一)「手詰」手厳しくつめよる。

(二)「利運過ぎ」身勝手。自分の利益ばかり考へ過ぎる。

し小腕取られよろくと、よろめく足の瓜先に可愛やはた
 と行き當る、二人の子供が目をさまし、大事の母様なせ連
 れて行く祖父様め、今から誰と寝ようぞと慕ひ歎けばヲ、
 いとしや、生れて一夜も母が肌を放さぬもの、晩からは父
 様とね、しや、二人の子供が朝ぶさ前忘れず、必ず桑山
 飲ませて下され、なう悲しやと言ひ捨つる跡に見捨つる子
 を捨つる、藪に夫婦の二股竹長き、別れと

下之卷

戀情、爰を瀬にせん蜷川流る、水も、行通ふ、人も音せぬ
 丑三の、空十五夜の月返えて、光は暗き門行燈大和や傳兵
 衛を一字書き、眠りがちなる拍子木に番太が足取千鳥足、

(一)「朝ぶさ」朝目をさまして大べる
 菓子。朝物(アサブチ)の略説したる
 のこと。
 (二)「桑山」桑山法橋傳の子供。
 攝州天王寺町瑞雲寺から出した。桑と
 食はとかけた。
 (三)「子を捨つる藪」藪「子を捨つる
 藪はあれど身を捨つる藪はない」。
 (四)「二股竹」夫婦二人をいふ。

(五)「爰を瀬にせん」こ、は會橋崎新
 地。「新古今」西行の「聞かずともこ、
 をせにせん時鳥山田の風の杉のむらだ
 ち」に取つた句。
 (六)「流る、水」瀬・蜷川の流。
 (七)「丑三」丑の三刻。今の午前三時
 半に當る。
 (八)「一字書」一筆書で字を一字一字
 離して書いたもの。
 (九)「番太」番太郎ともいふ。江戸時
 代自身書に附屬した夜書。

ごよざくも聲更けたり、駕籠の来いかう更けたのと、上の町から下女、迎ひの駕籠も大和屋の、漕りくわらくつと入り、紀伊の國屋の小春さん借りやんしよ、迎ひとばかりほの聞え、跡は三ツ四ツ挨拶の、程なく漕りによつと出で、小春様はお泊りじや、駕籠の衆すぐに休ましやれ、ア、言ひ残したは花車さん、小春様に氣を付けて下さんせ、太兵衛様への身請が済んで、金請取つたりや預り物、酒過ごさせて下んすなど、門の口から明日待たぬ、治兵衛小春が土になる種蒔き散らして歸りける、茶屋の茶釜も、夜一時休むは八つと七つとの間にちらつく短檠の、光も細く更くる夜の、川風寒く霜満てり、まだ夜が深い送らせましよ、治兵衛様

(一)「ごよざく」御用心ぢやくの

(二)「夜一時」一晩中。

(三)「八つ」午前二時。

(四)「七つ」午前四時。

(五)「短檠」タンケイ、檠の短し二尺ばかりの燈火。

のお歸りじや小春様起しませ、それ呼びませは亭主が聲、

治兵衛漕りをぐわさと明け、コレ、傳兵衛、小春に沙汰

なし耳へ入れば、夜明迄括られる、それ故能う寝させて脱

けて往ぬる、日が出てから起して往なしや、我ら今から歸

ると直に、買物の爲京へ上る、大分の用なれば、中拂ひの

間に合ふやうに歸るは不定、最前の金で、其方の算用合も

仕舞ひ、河庄が所へも後の月見の拂ひというて、四ツ百五十

め請取つてたもらうしと、福島の西悦坊が佛壇買うた奉加、

銀一枚回向しやれと遣つてたも、其外に懸り合はハアそれ

よく、磯都が花銀五、是ばかりじや仕舞うて寝やれ、さ

らば、戻つて逢はうと、二足三足行くより早く立歸り、

(一)「漕り」漕り戸。

(二)「括られる」暫め置かれる。

(三)「往なしや」行かした。

(四)「中拂ひ」盆と墓との中間の支拂。

(五)「算用合」勘定。

(六)「後の月見」九月十三夜の月見。

(七)「福島の西悦坊」常陸の名である。

(八)「銀一枚」四十三匁に當る。

(九)「花」露頭。

脇指忘れたちやつとく、何と傳兵衛、町人は爰が心易い、侍なれば其のま、切腹するであろの、我ら預つて置いてとんと失念、小刀も揃うたと、渡せば取つてしつかと指し、是さへあれば千人力、もう休みやれと立歸る、追付けお下りなされませ、ようござりまもそこく跡は樞をこつとりと、物音もなく静まれり、治兵衛はつ、と往ぬる顔、又引返す忍び足、大和屋の戸に縋り、内を覗いて見る内に、間近き人影びつくりして、向ひの家の物陰に過ぐる間しはし身を忍ぶ、弟故に氣を碎く粉屋孫右衛門は先に立ち、跡に丁稚の三五郎が、背中に甥の勘太郎つれ、行燈目當に駆け來り、大和屋の戸を打叩き、ちと物問ひませう、紙屋治

(四)「甥」 眞ひをかけた。

(二)「小刀」 小柄。
(三)「追付け」 その内。遠からず。

(三)「ようござりま」 よくおいでになりましたといふ挨拶の詞。その後を略したるもの。

兵衛は居ませぬか、ちよつと會せて下されと呼ばはれば、扱は兄きと治兵衛は、身動きもせず猶忍ぶ、内から男の寝はれ聲、治兵衛様はまちつと先に、京へ上るとてお歸りなされた、爰にてはござらぬと、重ねて何の音なひも、涙はら／＼孫右衛門、歸らば道で逢ひそなもの、京へとは合點が行かぬ、ア、氣遣ひで身が震ふ、小春をつれては行かぬかと、胸にぎつくり横はる、心苦しさ堪へかね、又戸を叩けば、夜ふけて誰じやもう寝ました、御無心ながら一度お尋ね申したい、紀伊の國屋の小春殿はお歸りなされたか、もし治兵衛と連れ立つて行きはなされぬか、ヤ、ヤ、何じや小春殿は二階に寝てじや、ア先づ心が落付いた、心中

(二)「寝はれ聲」 寝ぼけ聲。

(三)「まちつと」 もう一寸。

(三)「無にかけた」。

の念はない何處に屈んで此苦をかける、一門一家親兄弟が、
 固睡を呑んで臍腑を揉むとはよも知るまい、鼻の恨に我身
 を忘れ、無分別も出ようかと、意見の種に勘太郎を、つれて
 尋ぬる甲斐もなく、今迄逢はぬは何事と、おろろ涙の獨
 言、隠る、間の隔てねば、聞えて治兵衛も息を詰め涙呑み
 込むばかりなり、ヤイ三五郎、あはうめが夜うせる所
 外には知らぬかと、言へばあはうは我名ぞと心得て、知つ
 て居れど爰では恥かしうて言はれぬ、知つてゐるとはサア
 何處じや言うて聞かせ、聞いた跡で叱らしやんな、毎晩ち
 よこく行く處は、市の側の納屋の下、大痴呆めそれを誰
 が吟味する、サア來い裏町を尋ねて見ん、勘太郎に風邪ひか

(一)「臍腑を揉む」心配する。

(二)「あはうめ」治兵衛をさす。
(三)「うせる所」行く所、うせるは失せるの意。

(四)「納屋の下」と、納屋は物置。
惣謀の出た場所。

すな、言句にもたぬ父めを持つて、可愛や冷いめをする
 な、此冷さでしまへば可いが、ひよつと憂目は見せまい
 か、憎やくの底心は、不便くの裏町を、いざ尋ねんと
 行過ぐる、影隔たればかけ出でて、跡懐しげに伸び上り、
 心に物を言はせては、十悪人の此治兵衛、死に次第とも捨
 置かれず、跡から跡迄御厄介、勿躰なやと手を合せ、伏し
 拜み、猶此上のお慈悲には、子供が事をとばかりにて暫
 し、涙に咽びしが、とても覺悟を極めし上、小春や待たん
 と大和屋の、潜りの隙間さし覗けば、内にちらつく人影は小
 春じやないか、待てと知らせの合圖の咳、エヘン、くか
 つちくえへんに拍子木打交せて、上の町から番太郎が、

(一)「言句にもたぬ」いひやちもな
くつまらな。

(二)「不便くの裏町」表面では憎い
くといふが、裏即ち本心では、可愛
可愛と思ふ意を裏町につけた。

(三)「十悪人」十悪を重ねた悪人。
(四)「死に次第」死になりに。

くるくたぐる風の夜は、せきく廻る火用心、ごよざ、
く、くも人忍ぶ、我にはつらき葛城の、神隠れして遣
り過し、隙を窺ひ立寄れば、潜り内からそつと明く、小春
か、待つてか、治兵衛様早う出たいと氣をせけば、せく程
廻る車戸の、明くるを人や聞き付けんと、しやくつて明く
ればしやくつて響き、耳に轟く胸の内、治兵衛が外から手
を添へても、心震ひに手先も震ひ、三分四分五分一寸の、
先の地獄の苦しみより、鬼の見ぬ間とやうく明けて、
嬉しき年の朝、小春は内を脱け出でて、互ひに手に手を取
交はし、北へ行かうか南へか、に、し、か、東か行末も、
心の早瀬蜷川流る、月に逆らひて足を、はかりに

(一)「くるくたぐる」くるに來ると
眼の音とをかけ、くるをたぐるに重ね、
眼きたぐる意を表した。
(二)「せきく」せつくと同意。こ
れに眼をかけた。
(三)「葛城の」一言主神は顔をし
てゐたので、人目を忍んで夜ばかり出
たといふので隠れに隠れていつてあ
る。

(四)「一寸先の地獄」一寸先は
地獄。

(五)「鬼」地獄の鬼。

(六)「年の朝」下の、小春にかける。

(七)「足をはかりに」足に任せて。

名ごりの橋づくし

走り書き、諸の本は近衛流、野郎帽子は若紫、悪所狂の、
身の果は、斯く成り行くと、定まりし、釋迦の教もある事
か見たし憂き身の因果經、明日は世上の言種に、紙屋治兵
衛が心中と、あだ名散り行く櫻木に、根掘り葉掘りを繪草
紙の、版摺る紙の其中に有るとも知らぬ死神に、誘はれ行
くも商賣に、疎き報と觀念も、とすれば心ひかされて歩み、
惱むぞ道理なる、比は十月、十五夜の月にも見えぬ、身の
上は、心の闇の印かや、今置く霜は明日消ゆるはかなき
譬へのそれよりも先へ消え行く闇の内、いとし可愛と締め
て寝し、移香も何と、流れの、蜷川、西に見て、朝夕渡る、

(一)「走り書き」前説の「足をはかり
に」をうけ、諸本の書體の走り書きに
かけた。「萬草」に「享保五年の冬、
近松喬住吉新家の酒樓に遊びてありし
時、橋に大阪より芝居者來り、ゆらべ
綱島の大長寺に、男女の情死あり。何
卒速に大阪へ歸り、淨瑠璃に作りて給
はらば一日の種古にして、明後日より
興行せんとて、只管に頭みければ、早
瀬に乗りて大阪に歸り、潮より下りて
其ま、書きつけしとて、走り書と書き
出して云々」とあるが信じ難い。が興
味ある話として傳へられる。
(二)「近衛流」諸の本の書體。諸の本
は近衛流で書いてある。近衛流は藤長
の頃三條院近衛信尹が始めた書風。
(三)「野郎帽子は若紫」若紫歌謡伎の
役者の帽子は紫色であるのが定りであ
る。
(四)「斯く成り行く」こんな風に心中
して末期を遂げる。
(五)「憂き身の」因果經の序。
(六)「櫻木」阪木の事。その後にて、
なほりはばり、原などをつらねた。
(七)「根掘り葉掘り」詳しく。
(八)「死神」上の、紙にかけた。

此橋の天神橋は其昔、菅丞相と申せし時筑紫へ流され給ひしに、君を慕ひて大宰府へたつた一飛び梅田橋、跡おひ松の縁橋、別れを敷き、悲しみて跡に焦る、櫻橋、今に咄を聞き渡る、一首の歌の御威徳、かゝる尊き現神の、氏子と生まれし身を持つて、其方も殺し我も死ぬ、元はと、問へば分別のあのいたいけな貝殻に、一杯もなき蜆橋、短き物は我々が、此世の住居、秋の日よ十九と、廿八年の、今日の今宵を限りにて、二人いのちの棄て處、爺と婆との末迄もまめで添はんと契りしに、丸三年も、馴染まいで、此災難に大江橋あれ見や難波小橋から、舟入橋の濱傳ひ、是迄來れば來る程は冥途の道が近づくと、敷けば女もすがり寄り、

(一) 「一飛び梅田橋」 飛梅の傳説をいふ。この事大船に見えてある。
 (二) 「おひ松」 理と老とをかけた。若松町は、西天満にあり、曾根橋に接してある。松の縁から懸橋。
 (三) 「跡に焦る、櫻橋」 菅公の愛用の橋ばかりが後に残つたといふ傳説によつたもの。「橋は飛び橋は枯る、世の中に杉ばかりこそつれなかりけれ」と歌はれる。
 (四) 「一首の歌の御威徳」 「東風吹かば匂ひおこせよ梅の花、主なしとて春を忘るな」
 (五) 「現神」 あら人神。
 (六) 「いたいけな」 小さな。分別が小さな蜆の貝殻に一杯もない意から、蜆と起す。
 (七) 「蜆橋」 堂島橋の別名。

(八) 「大江橋」 大に流をかけた。大川の支流に架す。渡邊橋の東方に當る。
 (九) 「難波小橋」 大川と難波川の合流處に架してある。
 (一〇) 「舟入橋」 船島の倉屋敷へ引入れた海運に架した橋といふ。

(一) 「堀川」 大川筋から天満橋屋町まで引入れ大堀。

もう此道が冥途かと思交はす顔も見えぬ程、落つる涙に堀川の橋も水にや浸るらん、北へ歩めば、我宿を一目に見るも見返らず、子供の行衛女房の、哀れも胸に押しつゝみ、南へ渡る橋柱數も限らぬ家々を、いかに名付けて八軒屋、誰と伏見の下り舟着かぬ内にと道急ぐ、此世を捨て、行く身には、聞くも恐ろし、天満橋、淀と大和の二川を、一つ流れの大川や水と魚とはつれて行く、我も小春と二人づれ一つ刃の三瀬川、手向の水に請けたやな、何か敷かん、此世でこそは添はずとも、未來は、言ふに及ばず今度のく、すつと今度の其、先の世迄も夫婦ぞや、一ツ蓮の頼みには、一夏に一部、夏書せし、大慈大悲の普門品妙法連

(二) 「橋柱」 次の、敷を起こす。
 (三) 「八軒屋」 京橋二丁目、伏見通ひの乗船場。
 (四) 「誰と伏見」 誰と伏すにかけた。
 (五) 「天満橋」 天満にかけた。
 (六) 「淀と大和の二川」 淀川と大和川、この二川は京橋通で合流する。
 (七) 「大川」 大と合ふとをかけた。京橋下流の稱。
 (八) 「三瀬川」 一つ二つと日拍子で、三つとつゞけた。

(九) 「夏書」 四月十六日から七月十五日までを夏といふ。この間に經文を書きすることといふ。

華京橋を、越ゆれば到る彼の岸の玉の臺にのりをへて、佛の
 姿に身をなり橋、衆生濟度がまゝならば流の人の此後は、絶
 えて心中せぬ様に、守りたいぞと、及びなき、願ひも世上
 の世迷言、思ひやられて哀れなり野田の入江の、水けぶり、
 山の端白くほのくと、あれ寺々の、鐘の聲こうく、斯
 うしていつ迄か、とても長らへ果てぬ身を最期念がん此方
 へと手に百八の玉の緒を、涙の玉に繰り交せて南無網島の
 大長寺、敷の外面のいさ、川、流れ漲る樋の上を最期、所と
 着きにける
 なういつ迄うかく歩みても、愛ぞ人の死に場とて定ま
 りし所もなし、いざ愛を往生場と手を取り土に坐しけれ

(一)「京橋」大和川の淀川への合流點に架す。法華寺の屋を京に利かした。
 (二)「彼の岸」彼岸。
 (三)「のりをへて」乗り終へて、法を渡してとかけた。
 (四)「身をなり橋」身を成りにお成橋をかける。お成橋は備前島橋のこと。京橋の北に在る。
 (五)「流の人」遊女。

(六)「こうく」鐘の聲。

(七)「百八の玉の緒」珠數の玉と、命の玉の緒とにかけた。
 (八)「南無網島の大長寺」阿彌を網にかけた。大長寺はこの北端に在った。
 (九)「いさ、川」小川。

ば、さればこそ死に場はいつくも同じ事と言ひながら、私
 が道々思ふにも二人が死顔並べて、小春と紙屋治兵衛と心
 中と沙汰あらば、おさん様より頼みにて殺してくれるな殺
 すまい、挨拶切ると取交はせしその文を反古にし、大事の
 男を喰しての心中は、さすが一座流れの勤めの者、義理知
 らず偽り者と世の人千人萬人より、おさん様一人のさげし
 み、恨妬みもさぞと思ひやり、未來の迷ひは是一つ、私を愛
 で殺してこなさん何處ぞ所を變へ、ついと脇でと打凭れ口
 説けば共に口説き泣き、ア、愚痴なことばかりおさんは眞
 に取返され、暇を遣れば他人と他人、離別の女になんの義
 理、道すがら言ふ通り、今度のノ、ずんと今度の先の世迄

(一)「挨拶切る」縁を切る。
 (二)「一座流れ」その場限りの。一座限りの。多くの客に勤める。
 (三)「さげしみ」見下げられる。

も女夫と契る此二人、枕を並べ死ぬるに誰が誹る誰が妬む、
 サア其離別は誰が業私よりこなさん猶愚痴な、體が彼の世
 へ連立つか、所々の死にをしてたとへ此體は鶯鳥につ、
 かれても、二人の魂つきまつはり、地獄へも極樂へもつれ
 立つて下さんせと又伏し沈み泣きければ、ア、それよく
 此體は、地水火風死ぬれば空に歸る、後生七生朽ちせぬ、夫
 婦の魂離れの印合點と、脇指すはと抜き放し元結際より我
 黒髪、ふつ、と切つて是見や小春、此髪の有る中は紙屋治
 兵衛といふおさんが夫、髪切つたれば出家の身三界の家を
 出で、妻子珍寶不隨者の法師、おさんといふ女房なければ、
 お主が立つる義理もなしと涙ながら投げ出す、ア、嬉しう

(一)「所々の死に」別々に死ぬ。

(二)「三界」欲界・色界・無色界。

(三)「妻子珍寶不隨者」妻子も珍寶も、死に臨んでは、身に隨つて其途へつれて行くことが出来ない。大乗經。佛經「妻子珍寶及王位、臨命終時不隨者。」
 (四)「お主」小春をさふ。

(一)「投げ島田」根を低く結つた島田髷。さげしまだともいふ。投げに、無をかけた。

(二)「捨身」肉體を捨てる事。

(三)「縮緬」縮に、散るをかけた。
 (四)「二重廻り」抱帯が二重廻りの長なであつた。
 (五)「廻板木」櫛の根。水の流出を調節するために設ける。
 (六)「鼠結び」鼠は雉の威。輪の形にして、引けば纏るやうに結ぶ。

ござんすと小春も脇指取上げ洗ひつ梳いつ撫で付けし、酷
 や惜氣も投げ島田はらりと切つて投げ捨つる、枯野の薄夜
 半の霜共に亂る、哀れさよ、浮世を遁れし、尼法師、夫婦
 の義理とは俗の昔、とてものことにさつぱりと死場も變へ
 て山と川、此櫛の上を山になぞらへ其方が最期場我は又、
 此流れにて首縊り最期は同じ時ながら、捨身の品も所も變
 へておさんに立て抜く心の道、その抱へ帯こなたへと若紫
 の色も香も、無常の風に縮緬の此世あの世の二重廻り、櫛
 の廻板木にしつかと括り先を結んで狩場の雉の、妻ゆる我
 も首締め括る鼠結び、我と我身の死に拵へ見るに目も昏れ
 心くれ、こなさんそれで死なしやんする、所を隔て死ぬれ

ば側に居るも少しの間、爰へ〜と手を取り合ひ刃で死ぬるは一思ひ、さぞ苦痛なされうと、思へばいとしい〜と止め、かねたる忍び泣き、首括るも咽突くも死ぬるにおろかのあるものか、よしない事に氣を觸れ最期の念を亂さずとも、西へ〜と行く月を如來と拜み目を放さず、只西方を忘りやるな、心残りの事あらば言うて死にや、何も無い〜、こなさん定めてお二人の子たちの事が氣にかゝろ、アレひよんな事言ひ出して又泣かしやる、父親が今死ぬるとも何心なくすや〜と、可愛や寝顔見る様な、忘れぬはこればつかりとかつばと伏して泣き沈む、聲も争ふ村鳥ねぐら離れて鳴く聲は、今のあはれを問ふやとていと涙を添へにける、なうあれを聞きや二人を冥途へ迎ひの鳥、牛王の裏に誓紙一枚書く度に、熊野の鳥がお山にて三羽づつ死ぬると、昔より言ひ傳へしが、我とそなたが新玉の年の始に起請の書き初め、月の初月頭書きし誓紙の數々、その度毎に三羽づ、殺せし鳥は幾許ぞや、常には可愛〜と聞く今宵の耳へは、其殺生の恨の罪、報い〜と聞ゆるぞや、報いとは誰故ぞ我故つらき死を遂ぐる、許してくれと拘き寄すれば、いやわし故と締め寄せて顔と顔を打重ね、涙に閉づる鬢の髪野邊の、嵐に凍りけり、後ろに響く大長寺の鐘の聲、南無三寶長き夜も、夫婦が命短夜とはや明け渡る、晨朝に最期は今ぞと引寄せて、跡迄残る死に顔に泣き顔残

(一)「西方」西方淨土。

(一)「晨朝」あした。明け六つ。

すな残さじと、につと笑顔の白々と霜に凍えて手も震ひ、
 我から先に目もくらみ刃の立て所も泣く涙、ア、急ぐまい
 〳〵早う〳〵と女が勇むを力草、風誘ひくる念佛は我に勸
 むる南無阿彌陀佛、彌陀の利劔とぐつと刺され引据ゑても
 のり反り、七顛八倒こはいかに切先咽の笛を外れ、死にも
 やらざる最期の業苦共に亂れて、苦しみの、氣を取り直し
 引寄せて、鐔元迄刺通したる一刀、刺る苦しき曉の見果て
 ぬ夢と消え果てたり、頭北面西右脇臥に羽織打被せ死骸を
 つくろひ、泣いて盡きせぬ名残の袂見捨て、拘へを手繰り
 よせ、首に畏を引掛くる寺の念佛も切回向、有縁無縁乃至法
 界、平等の聲を限りに樋の上より、一蓮托生なむあみだ佛

(一) 「立て所」 あてる所。
 (二) 「泣く涙」 泣くに無くをかけた。

(三) 「のり反り」 そりかへる。

(四) 「頭北面西右脇臥」 羅道の入滅の時の姿で、死人をそれに準へて寝かす。

(五) 「切回向」 念佛を終る時の回向の意。
 (六) 「有縁無縁乃至法界平等」 淨土宗、切回向の文「三界萬靈、六道衆生、有縁無縁、乃至法界、平等利益」とある。

と踏み外し暫苦しむ、生瓢風に揺らるゝ如くにて、次第に
 絶ゆる呼吸の道息堰き止むる樋の口に、此世の縁は切れ果
 てたり、朝出の漁夫が網の目に見付けて死んだヤレ死んだ、
 出合へ〳〵と聲々に言ひ廣めたる物語、直に成佛得脱の誓
 ひの網島心中と目毎に、涙をかけにける

(一) 「生瓢」 瓢箪の事。盛死の形容。

(二) 「樋の口」 せきとむるからか、

(三) 「得脱」 苦界から脱すること。

(四) 「誓ひの網」 佛の誓願の網。網によつて救ふ意がある。

(五) 「目」 網の縁語。

昭和十年二月七日印刷
昭和十年二月十一日發行

心中天胡島
【定價三十錢】

著者 藤村作

發行者 栗田確也

印刷者 白井赫太郎

東京市神田區神保町一ノ三九番地
東京市神田區錦町三丁目一番地

精興社印刷

發行所

東京市神田區神保町一ノ三九番地
電話 二二四三三番
二二六三三番
二二四三三番
二二六三三番
二二四三三番
二二六三三番

栗田書店

新選近代文學
註解叢書發刊に就いて

藤村 作

古典文學は註釋に依らなければ、一般國民には讀解は出來ないから、古來その註解書、評釋書の類は多く、屋上屋を架するにも至つた。現代人は近世文學を通讀して、一通りの意を了解し得たやうな氣がするから、殆どその註釋書がない。併し満足に讀まうとする人にはやはり註釋は必要である。本叢書はこのことに鑑みて、一般讀書の爲に適當と信ずる註釋を施した。その程度は、學究的煩瑣に陥らざるやう、さうして折角ありはありながら一向物足らないといふ不備を避けて、一讀その意を了解し得るに差支なきを期した。簡單にいへば大學、専門學校學生の自習程度にした積りである。簡單に國文學は決して獨り國文學者の國文學であつてはならない。本叢書の任はそこにある。著者の目的はそこにある。

註解書		新選近代文學				文學博士 藤村 作			
高井几童續明烏	井原西鶴本朝二十不孝	井原西鶴世間胸算用	近松門左衛門國姓爺合戰	近松門左衛門女殺油地獄	近松門左衛門心中天網島	近松門左衛門長町女腹切	近松門左衛門曾根崎心中	小林一茶おらが春	谷口蕪村新花摘
續刊	續刊	續刊	續刊	送料價三十四錢	送料價三十四錢	送料價三十四錢	送料價三十四錢	送料價三十四錢	送料價五十六錢

振替東京一三二四
長六四七
三三九七
電話神田
栗田書店
東京市神田區
保町一丁目

日本文學論叢

<small>東京女子 大學教授</small> 倉野憲司著 古事記新論 續刊	<small>東京女子 大學教授</small> 池田龜鑑著 古代小說論攷 續刊	<small>東京女子 大學教授</small> 高木市之助著 平家物語管見 續刊	<small>東京女子 大學教授</small> 笹野堅著 能樂概論 續刊	<small>東京女子 大學教授</small> 藤村作著 近松戲曲考說 續刊	<small>東京女子 大學教授</small> 藤村作著 西鶴評論 續刊	<small>東京女子 大學教授</small> 片岡良一著 自然主義作家の研究 續刊
--	---	--	--	--	--	--

定價
廿三
四錢

東京市神田區保一丁目 栗田書店
電話 神田 25

終

栗田書店版